歴代藩主家系

堀尾氏　慶長5年(1600)～寛永10年(1633)

24万石　松江開府の祖 吉晴
初代藩主 忠氏 ― 2代 忠晴

堀尾吉晴

慶長5年（1600年）の関ヶ原合戦の後、出雲・隠岐両国を拝領した子の忠氏と共に、遠江国浜松（静岡県）から月山富田城（広瀬）に入ったが、松江の将来性に着目して城地を移した。豊臣秀吉、徳川家康と二人の天下人に仕え、豊臣政権下では三中老の一人として功績を残している。城普請の名人であり、孫の忠晴を助け松江城と城下町を建設し、現在の松江市の礎を築いた。

京極氏　寛永11年(1634)～寛永14年(1637)

26万4千石　初代 忠高

京極忠高

堀尾家の跡を継ぎ、若狭国小浜（福井県）から出雲に入国した。3年余りの短い統治期間であったが、当時、度重なる洪水で氾濫を起こしていた斐伊川を大土手により改修をした。現在でも京極若狭守忠高にちなんだ「若狭土手」という名を残している。また、幕府直轄領であった石見銀山（世界文化遺産）の監督権を与えられるなど、歴代松江藩主のなかで最大の領地を治めた。徳川二代将軍・秀忠と正妻・江夫妻の四女が忠高の正妻・初である。

松平氏　寛永15年(1638)～明治4年(1871)

18万6千石　初代 直政～ 10代 定安

松平直政

京極家の跡を継ぎ、信濃国松本（長野県）から出雲に入国した。慶長19年（1614年）、14歳で大坂冬の陣に参戦し、初陣ながらも力戦奮闘した。敵将真田幸村は、その武勇を讃えて自らの軍扇を投げ与えたという。徳川初代将軍・家康の第二子・結城秀康の第三子である。

松平治郷（不昧）

松平七代藩主で、若い頃から茶禅の道を学んで独自の流儀を確立し、現在でも不昧流として継承されている。江戸時代後期の大名茶人で陶芸、漆工なども振興し、茶どころ松江の礎を築いた。当時逼迫していた藩財政を、家老・朝日丹波の「御立派の改革」により立て直した。

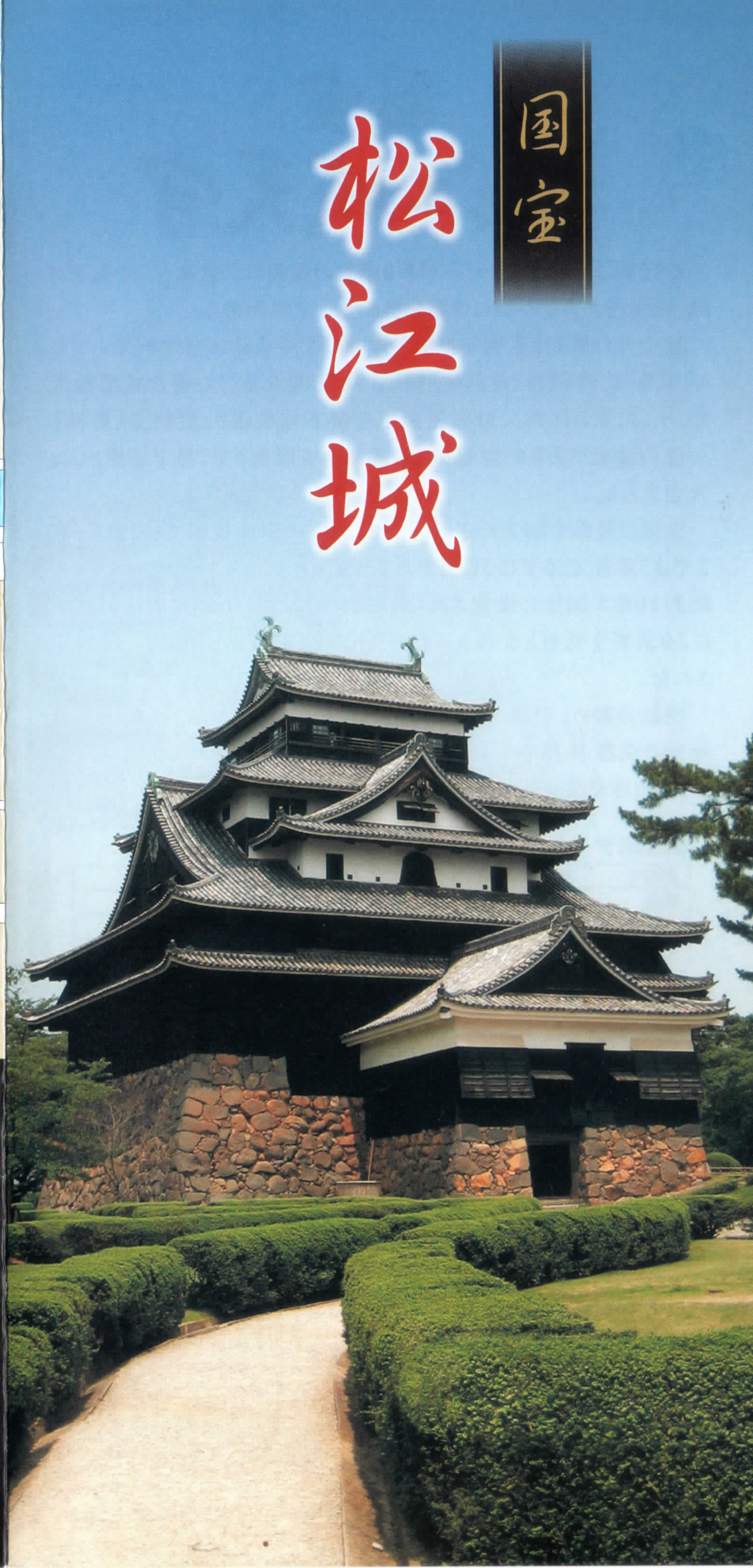
●本丸開門時間
4月1日から9月30日　午前7時～午後7時30分
10月1日から3月31日　午前8時30分～午後5時

●登閣時間
4月1日から9月30日　午前8時30分～午後6時30分
（登閣受付けは午後6時まで）
10月1日から3月31日　午前8時30分～午後5時
（登閣受付けは午後4時30分まで）

●年中無休

松江城山公園管理事務所
〒690-0887 松江市殿町1番地5
☎(0852)21-4030 FAX(0852)21-4211
http://www.matsue-tourism.or.jp/m_castle/m_castle.htm

国宝 松江城



国宝
松江城天守

松江城は平山城で、天守がある本丸の周辺に二之丸、二之丸下ノ段、後曲輪がめぐり、南には堀を挟んで三之丸がある。

城全体の構えは東側を正面とするが、天守自体は南向きとなっている。天守は、彦根城・犬山城と同じように附櫓を設けた複合式望楼型で、一、二重目は大入母屋屋根で全面下見板張り、望楼部と附櫓も一部白漆喰であるが窓廻りの木部は全て黒塗りで、黒を基調とした天守である。

全国に現存する12天守の一つで、天守の平面規模では2番目、高さでは3番目、古さでは5番目である（国宝・重要文化財建造物目録／文化庁編）。昭和10年に国宝に指定され、昭和25年には文化財保護法の制定により重要文化財と改称されたが、平成27年7月8日、国宝に再指定された。

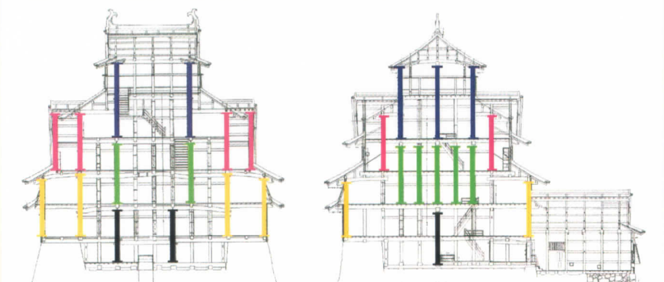
明治の初め、全国の城はほとんど取り壊されたが、松江城天守は地元の豪農 勝部本右衛門、旧松江藩士 高城権八らの有志の奔走によって山陰で唯一保存され、松江のシンボルとして親しまれている。

松江城データ

築城年	慶長16年（1611年）	築城主	堀尾 忠晴
構造	複合式望楼型 四重五階天守、地下一階付		
1階床面積	447.23㎡		
高さ	約30m（天守高22.43m＋石垣高平均値7.57m）		

松江城天守の構造上の特色

2階分を貫く通し柱を効果的に配置するとともに、上層の重さを分散させながら下層に伝える構造となっている。長大な柱を用いることなく、上層になるほど平面が縮小する天守という独特な構造の建築を可能にしたものである。



東西断面図　　南北断面図

（西和夫氏作製：色付けされた柱が各2階分を貫く通し柱）

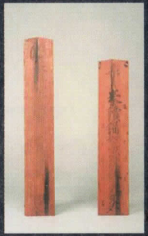
国宝附指定 3件

祈祷札 2枚

平成24年5月に発見された2枚の祈祷札からは、「慶長拾六年正月吉祥日」などの文字が確認され、慶長16年（1611）とされていた松江城の築城時期が、慶長16年正月以前であることが確実となった。2枚の祈祷札は、地階の2本の通し柱に打ち付けられていたことが、調査の結果明らかとなった。松江城天守は、築城当時の史料によって完成時期を確認できる数少ない現存天守のひとつである。（松江歴史館に収蔵）

慶長十六暦　欽
（梵）奉読誦如意珠経長栄処
正月吉祥日　言

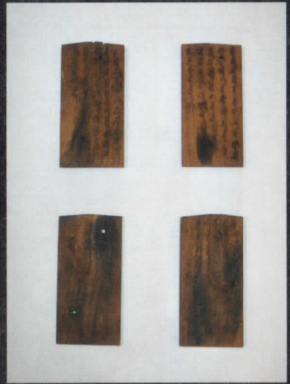
慶長拾六年　辛亥　大山寺　敬
（梵）奉轉讀大般若経六百部　武運長久処
正月吉祥日　白



鎮宅祈祷札 4枚

＊右上・下「不動鎮宅真言」
＊左上「加護所住処　真言」
＊左下「八字文殊真言」

昭和の解体修理工事（昭和25～30年）で天守内の柱や梁から発見された4枚の鎮宅祈祷札で、梵字の願文が記されている。打ち付けられていた方位等とあわせ、真言密教の鎮宅の修法を極めて厳密に行なったことを示すもので、他の2件とともに、築城に際し三態、三様の祈祷が行なわれたことを示す貴重な資料である。（松江歴史館に収蔵）



鎮物 3点

＊左「槍」　＊右上「祈祷札」　＊右下「玉石」

昭和の解体修理工事（昭和25～30年）の際に天守地階の南西隅（裏鬼門）の大根太受け礎石の下から発見された鎮物一式である。築城に際しての地祭りの鎮物で、発見された祈祷関係の資料の中で最も初期のものであり、他の2件とともに、築城に際し三態、三様の祈祷が行なわれていたことを示す貴重な資料である。（松江歴史館に収蔵）

「富」の文字が入った分銅紋の刻印のある部材

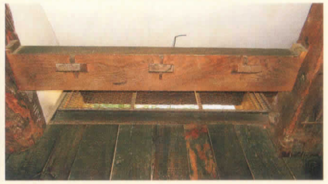
昭和の解体修理工事（昭和25～30年）で取り外され、天守地階に保存してある部材の木口に、松江藩初代藩主堀尾家の家紋・分銅紋に「富」の文字が入った刻印があることが確認された。
松江城築城には、広瀬の月山富田城の部材を一部転用したとの伝承があることから、この刻印はそれを裏付ける貴重な資料のひとつと考えられている。（地階に展示中）

地階と祈祷札の打ち付け場所

模擬札を使って打ち付け位置を再現した様子。（丸で囲われた部分）
地階は籠城用生活物資の貯蔵倉庫であり、穴蔵の間と呼ばれ、塩などが備蓄されていた。
中央には深さ約24mの井戸があり、常時飲料水が得られた。

石落とし・狭間

天守に近づく敵に石を落として攻撃するための石落としや、鉄砲で攻撃するための鉄砲狭間がある。いずれも外部からは発見しにくい構造になっている。



包板（つつみいた）

天守を支える柱には、一面だけ、あるいは二面、三面、四面に板を張って、鎹や鉄輪で留められているものがある。これは「包板（つつみいた）」と呼ばれ、天守にある総数308本の柱のうち130本に施してあったもので、割れ隠しなど不良材の体裁を整えるためのものと考えられている。

附櫓（つけやぐら）

天守入口の防備をかたくするためにとり付けた櫓で、入口に鉄延板張りの大戸があり、入ると桝形の小広場が二段あって、侵入しにくいようになっている。

櫓3棟復元

かつて二之丸には、御門・東の櫓・太鼓櫓・中櫓・南櫓・御月見櫓があった。このうち、太鼓を打って時刻を知らせる太鼓櫓と御具足蔵と呼ばれた中櫓、南東方向を監視するための2階建ての南櫓の3棟の櫓は、平成13年に約125年ぶり（明治8年取壊し）に復元された。